

ブルガリア語のアドミラティヴ (admirativ) について

菱川 邦俊

1. はじめに

現代ブルガリア語の動詞体系は、形態と意味の点でひじょうに多様性に富んだ姿を醸し出している。ブルガリア語において動詞体系は古代ブルガリア語が持っていた豊かな動詞体系を維持しつつ、バルカン諸語の影響を受けて収斂し、新しいカテゴリーを加えながら発展してきた経緯がある。他のスラヴ諸語が古い動詞体系を著しく簡素化してきたのに対して、ブルガリア語は不定形など一部を除いて、ほぼすべての動詞形態とそれに関連する文法的意味を現在まで維持している。現代ブルガリア語動詞体系の大きな特徴は、時制カテゴリーを表す9つの時制形態があることに加え、伝聞・推量・驚異などを表すための特別な形態を持っていることである。

日常の話し言葉では話し手の伝えたい内容に応じてさまざまな動詞形態が用いられるが、話し手が実際に関わった（あるいは関わっている最中の、あるいはこれから関わる）出来事に対してブルガリア語では、現在形、未来形、定過去（アオリスト）形、半過去（インペルフェクト）形、現在完了形など9つの時制形態を有する直説法によって表現され、さらに、出来事に対する話し手の主観の有無、目撃性の有無に応じて表現される一連の形態（ここでは第二直説法としておく）が用意されており、そのほかにも命令法、仮定法が存在する。

なかでも第二直説法は、直説法で表される、話者の直接体験や直接的な断定の範囲外のこととして、推論、伝聞、驚異などのニュアンスを伴って事実を述べるために用いられる形として認識されてきたが、情報源を表す意味カテゴリーとして証拠性の概念が認識されると、話し手の情報に対する態度との関わりから文法的意味を分類し、法（наклонение）、証拠性（евиденциалност）、アドミラティヴ性（адмиративност）が指摘されるようになってきた。ニツォロヴァ（Ницолова 2008 : 224）によれば、法は動作に対する主体の態度を表し、証拠性は情報源を意味、そして何らかの再話形の転置であるアドミラティヴ性はある種の認知モードを表わす。

本稿ではブルガリア語のアドミラティヴ (admirativ / адмиратив) について、ブルガリア語文法における先行研究を概観しながら問題点を整理し、アドミラティヴの事例

研究として、л 分詞で示されるアドミラティヴの用法について分析することを目的とする。

2. アドミラティヴの展開（概観と問題点の整理）

2-1. л 分詞を用いた表現方法

ブルガリア語のアドミラティヴについて最初に言及したのはトリフォノフ（Трифонов 1905 : 155-192）で、広く知られるようになったのはヴァイガンド（Weigand 1925 : 150-152）の論文¹による。バルカン諸語に精通していたヴァイガンドは、「驚き、驚異（адмирация）」を表す л 分詞の用法に注目し、発話の瞬間まで未知だったことがらについて驚きを表すために用いられるペルフェクトを現在時制に代わる用法ととらえ、アルバニア語のアドミラティヴと同等の現象とした。ヴァイガンドはさらにブルガリア語のアドミラティヴの起源にはブルガリア人とアルバニア人の混在地域におけるアルバニア語の影響があったと考えた。しかし、このヴァイガンドの考え方に対して、ロマンスキ（Романски 1926 : 8-10）、ベシェヴリエフ（Бешевлиев 1928 : 174-177）、ゲルジコフ（Герджиков 1984 : 101-121）等は、ブルガリア語のアドミラティヴは外的影響による結果ではなく、ペルフェクトの拡張した用法とみなした。ヴァイガンドの考えは混在地域におけるアルバニア人とブルガリア人の言語文化的接触が欠如していたという歴史学的見地からだけでなく、文献学的見地からも否定された。本稿筆者はブルガリア語のアドミラティヴがアルバニア語の影響による発生か否かはともかく、バルカン地域における民族間接触によって多かれ少なかれ互いに影響し合った結果生じた現象ではないかと考える²。

ヴァイガンドが、л 分詞が「驚異（адмирация）」を表す点を指摘したことは注目に値するだろう。このヴァイガンドの論文を機に、アンドレイチン（Андрейчин 1938/1976 : 346）は「話し手にとって予期せぬ出来事（неочаквани за говорещото лице факти）」を表現する際に用いられる（л 分詞を用いた）間接話法の形態」を驚きのモダリティーとしてとらえ“inopinativus”という用語を導入しつつ説明した。また、イヴァンチェフ（Иванчев 1973/1976 : 358）は「自分たちがいないところで起こった出来事に対して

¹ Weigand の論文はヴェリコ・タルノヴォ大学の開設ページ“Езиково и езиковедско наследство”（言語と言語学遺産）からアクセス可能（<http://e-nasledstvo.com/index.php/2014-12-17-07-35-48/40-der-admirativ-im-bulgarischen> 最終アクセス日：2022年3月10日）。また、ブルガリア語訳は <http://e-nasledstvo.com/data/tvorbi/administrativ-prevod.pdf> から参照できる（最終アクセス日：2022年3月10日）。

² ほかのバルカン諸語との関係性については、2-2. で検討をする。

だけではなく、自分たちの目の前で起きている出来事に対しても驚きを表す」形として用いられるとし、前二者の用語に対して“екскламатив”という語を用いて記述を試みた。

ここで浮き彫りになる問題点は、л分詞を用いた表現方法がペルフェクトの拡張した用法なのか、第二直説法の一つとして扱うものなのかということである。この点に関して、アンドレイチン (Андрейчин 1938/1976 : 346)、ストヤノフ (Стоянов 1964/1984/1999)、マスロフ (Маслов 1981/1982)、アカデミー文法 (БАН 1983/1993 : 361-362) は伝聞の特殊用法として第二直説法に区分している。

たとえば、アカデミー文法 (БАН 1983/1993 : 351-372) では、「予期せぬ動作の発話」を表す再話法の用法として、「動詞の法 (Наклонение на глагола)」の「2. 再話法 (Презказно наклонение)」の項に分類し扱っている。具体的な例も含めて当該箇所の記述をみてみよう (アカデミー文法 1983/1993 : 361-362)。

§465. 予期せぬ動作の発話。再話法現在形は、特に話し言葉 (говоримата реч) において、予期せぬ事実 (факти) や状況 (положения) を意味するために用いられる。

例) “Туй *не било* злато! Никакво злато не е (Й. Йовков).”

「これは金ではないぞ! まったく金なんかではない!」

“Виж каква *била* (=каква е) работата! (Й. Йовков).”

「ほら、何をしでかしているんだか!」

“Та тоя човек *бил* (=е) светец! – каза той (Ив. Вазов).”

「なんと、あの方は聖者のようなお人だったのか! と彼は言った」

“Боже мой, какви низости *имало* (=има) на света! (Ив. Вазов).”

「まあ、この世にはなんとという悪事があることか!」

“Чорбаджи, ти *си имал* (=имаш) лепа девойка, машалла (Ив. Вазов).”

「旦那、美しいお嬢様をお持ちで。マシヤラ」

“Ти *си знаел* (=знаеш) интересни неща, а мълчиш.”

「お前さんはおもしろいことを知っているのに、黙っているんだから」

半世紀前にドイツのバルカニスト G.バイガンド (Г. Вайганд) は、このようなケースにおいて驚きを表すとの意見を述べた (それら中に彼は特別な法 “admirativus”をみていた)。しかしながら、より正確に申せば、この中に我々は感

情カテゴリーの「驚き (учудване)」よりも、意味カテゴリーの「意外性 (неочакваност)」をみていることだろう。

一方、イヴァンチェフ (Иванчев 1973/1976 : 358-359) は“екскламатив”という語を提唱し、ペルフェクトの拡張した用法であることを主張する。

これまでアドミラティヴの名称で知られるモーダルの用語は再話法と形式的に関連付けられてきたが、その意味には再話性の言及がないため、その起源と存在そのものがある種の謎に包まれてきた。

実際にエクスクラマティヴ (екскламатив / eksklamativ) はパーフェクトに帰することができよう。完了体動詞によるその形態で我々がいない時に起きたことを断定している。我々がこの出来事を予期せず、驚いた場合には、感嘆のイントネーションでこの形式を発話する (往々にして呼応する間投詞を伴う)。感嘆のイントネーションと連音の何らかの条件によって繫辞動詞の3人称単数形と複数形の発音が蔑ろにされる結果となる。ある種の感嘆のイントネーションは形式的な関係と、何よりも意味的な関係の点でこのようなケースを隔離する。我々は自分たちがいないところで起こった出来事に対してだけではなく、自分たちの目の前で起きている出来事に対しても驚きを表す必要性があり、定過去 (アオリスト) 分詞の用法に半過去 (インペルフェクト) 分詞の用法も加えたのである (Я, гледай, той четял, бе! 「ほら、ごらん、彼が読んでるよ!」)。このように感嘆のペルフェクトがエクスクラマティヴに拡張し、深く意味的に関係がありつつも異なるモーダルな意味を持つ再話法と形式的に等しくなったのである。

ペルフェクトの拡張した用法とするイヴァンチェフに対して、ゲルジコフ (Герджиков 1984 : 106) は、ペルフェクトにはアオリスト語幹の能動分詞だけが有効であり、インペルフェクト語幹の能動分詞を用いた形はないことを理由に挙げ、アドミラティヴはペルフェクトではないと指摘する。また、繫辞動詞3人称の脱落については、ゲルジコフ (Герджиков 1984 : 111) は、アドミラティヴは繫辞動詞3人称が脱落する推論モード (умозаклучителен модус) の形式による特別な感情表現用法であるとしている。

そもそもブルガリア語には性と数の区別を持つ能動分詞と受動分詞がある。能動分詞には現在能動分詞と過去能動分詞があり、とくに過去能動分詞は語尾の特徴から π 分詞ともよばれ、定過去 (アオリスト) 語幹から作られる定過去 (アオリスト) 能動分詞と半過去 (インペルフェクト) 語幹から作られる半過去 (インペルフェクト) 能

動分詞の2つが存在する。定過去（アオリスト）が完了体・不完了体双方の動詞から作ることが可能であるように、定過去（アオリスト）能動分詞も双方の体の動詞から形成することが可能となっている。そして、基本的な直説法の時制体系のうち、現在完了（минало неопределено време）や過去完了（минало предварително време）、未来完了（бъдеще предварително време）、前未来完了（бъдеще време в миналото）では定過去分詞が繫辞とともに用いられることになっている。この、体と時制と μ 分詞の相関性が文法上の解釈を複雑にしている³。

2-2. トルコ語の動詞接尾辞-miş との関係性

ブルガリア語のアドミラティヴはトルコ語のアドミラティヴに類型論的類似を示していると言われる（Герджиков 1984 : 119 ; Ницолова 2008 : 376-377 ほか）。ブルガリア語のアドミラティヴが再話形態の転置であるのに対して、トルコ語のアドミラティヴでは動詞接尾辞-miş が用いられ、非経験回想、伝承回想や断定等を表すとされる。

竹内（1970 : 73）によれば、トルコ語の動詞接尾辞-miş は「その動作が話し手の直接目にふれたものではなく、他人から聞いたり別の方法で知ったりしてものであることを示」し、さらに「はっきりした意識をもたないで行われた動作、あとになって自分の意識に入って来た動作、疑わしい動作、思いがけない動作、見かけだけの動作などを示す」という。スロビン／アクス（Slobin, Aksu 1982）は、トルコ語では過去を表す接辞に-di と-miş があり、前者が直接経験を、後者が間接経験を表すが、とくに-miş は直接的な知覚によって得た情報も表すことができると指摘する。たとえば、“Kemal gel-miş” 「ケマルが来た」はスロビン／アクス（Slobin, Aksu 1982 : 187）の記述によると、「発話者は誰かがやってくるのを耳にし、ドアを開けると、まったく予期していなかった訪問者であるケマルを目にする」という、間接経験のみならず、発話者の驚きを伴う直接経験をも表現する。

一方、ブルガリア語のアドミラティヴにみられる同様の表現をイヴァンチェフ

³ たとえば、現在完了の用法の一つに、過去に行われた動作の結果が発話時における目の前に残っていることを表すというものがある。例：“През ноща е валял сняг.” 「夜の中に雪が降った」。発話時以前の過去の動作に言及する点では定過去（アオリスト）に類似する部分もあるが、定過去（アオリスト）が現在の視点から切り離された過去の動作に言及するのに対して、現在完了は過去の動作によって引き起こされた結果を現在の視点から言及している点にある。さらに、今は降っていないがあたり一面が真っ白になっているのを目にした話し手が、目の前には雪が降った後の結果が残っているという目の結果を見て、話し手の判断が加われば、「夜の中に雪が降ったようだ」というニュアンスで理解し、あるいは発話することも可能である。ブルガリア語の複合時制（繫辞動詞+ μ 分詞で表される現在完了や過去完了等の時制形態）における体の用法については別の機会に議論したい。

(Иванчев 1973/1976 : 359) が引き合いに出している例文からみてみたい。“Я, гледай, той четял, бе!” 「ほら、ごらん、彼が読んでるよ！」これは、話し手が、これまで本を読むことができないと思っていた人物が目の前で本を読んでいる姿を目にしたときに発したことばである。ニツォロヴァ (Ницолова 2008 : 224) によれば、ブルガリア語のアドミラティヴは、まさに発話の瞬間の直前に突然設定された事実による話し手の驚きを表すという。その話し手の驚きを表すメカニズムはこの事実に対して新しく得た知識が、話し手のそれ以前の未知の状態と対象をなすからであるという。

このトルコ語とブルガリア語にみられる現象が偶然の一致とは思えない。ツォネフ (Цонев 1937/1985 : 106) は、ブルガリア東部が西部よりもトルコ人と共存度が高い点に注目し、東部方言にあつて西部方言にない諸現象から、トルコ語の影響のもとでブルガリア語の動詞体系が豊かになったとの見方を示している。また、ミルチェフ (Мирчев 1978 : 94-95, 206, 231-233) は、北西ブルガリア方言など一部のブルガリア語方言の中には、半過去 (インペルフェクト) 分詞が存在せず、第二直説法の形態を持たないことが多い点に着目し、第二直説法がトルコ語の影響のもとに文章語に生じた形態であるとみなしている。本稿筆者がアドミラティヴをバルカン地域における民族間接触によって多かれ少なかれ互いに影響し合った結果生じた現象ではないかと考える所以もここにある。

3. アドミラティヴの意味と用法

本項では、アドミラティヴの事例研究として、*л*分詞で示されるアドミラティヴの用法について分析を試みたい。

3-1. 文学作品にみられるアドミラティヴ

まずは、文学作品の中からアドミラティヴの用例を検討したい。

“Туй не било злато! Никакво злато не е!”

「これは金ではないぞ！まったく金なんかではない！」

これはヨルダン・ヨフコフ (Йовков Йо., 1880-1937) の作品 “Жетварят (刈り手)” にあるセリフで、二人の主人公があるイコン画に施されている金の後光を盗みに行った時の話しである。盗んだあと主人公のうちの一人がそれをナイフで削ると、実際には金ではないことに気付き、突然の苛立ちと怒りから顔が真っ赤になり発したことばが上記のセリフである。金があることを期待しながらナイフで削り取るとそれが金ではないことを知る。そこで発した前半の文がアドミラティヴで語られているのである。

そこには発話の瞬間の直前までまったく認知していなかった事実（金だと思い込んでいたこと）と発話の瞬間の直前に認知した事実（金ではないということ）にギャップがあり、そこで発する際にアドミラティヴが用いられている。それに続く「まったく金なんかない！」という文では、断定的な事実として直説法現在で語られるのである。すなわち、アドミラティヴが話し手にとって期待していなかった情報を表すのに対して、直説法現在は話し手にとって既に既知の情報を伝えている⁴。

次に、

“Та тоя човек бил светец! – каза той.”

「なんと、あの方は聖者のようなお人だったのか！と彼は言った」

これはイヴァン・ヴァゾフ (Вазов И., 1850-1921) の作品“Под игото (軛の下で)”にあるヴィケンティ輔祭と主人公オグニャーノフの会話の一部である。ブルガリア人の蜂起のために金策に走っていたヴィケンティ輔祭はイエロティ師の財布からトルコ金貨二百枚を僧服の袖に取り分けけたところで、イエロティ師に見つかってしまう。もともとこのお金はヴィケンティ輔祭がブルガリアの役に立つべくキエフで神学を修めるためにイエロティ師が貯めていたものであり、その事実を知ったヴィケンティ輔祭はイエロティ師に許しを乞う。事情を聞いたイエロティ師はブルガリア救済のために使うが良いとヴィケンティ輔祭にお金を持たせる。その経緯をヴィケンティ輔祭から耳にしたオグニャーノフが発したことばである。オグニャーノフは次のセリフで「わたしは修道僧の愛国心などあまり買っていなかったのだ」と胸の内を明かす。つまり、このオグニャーノフの語りでは、ヴィケンティ輔祭によって語られた話の内容を聞く前と後では認知が異なり、アドミラティヴで語られているのである。

もう一点、

“Виж каква била работата! Не в гората, а тук, в нивята се крила...”

「ほら、何をしているんだか！森じゃなくて、あらっ、畑に隠れちゃった…」

ヨフコフの作品“Грехът на Иван Белин (イヴァン・ベリンのあやまち)”からの引用である。イヴァンの羊の群れを狙う狼の動向を注視し、狼が森ではなく畑に隠れたのを見て発したイヴァンのことば。目の前で繰り広げられる行為は直説法で語られるのがふつうである。ここでアドミラティヴがみられるのは、話し手が予想していたの

⁴ DeLancey (2001 : 379) は、その情報が、話し手にとって新しい知識なのか、それともすでに話し手の世界観に組み込まれている知識なのかを示すのが *Mirativity* であると説明する。

とは違う行為に出た狼の行動に反応したためである。話し手にとって狼の行動は意外だったのであろう。

3-2. はなしことばにみられるアドミラティヴ

続いて、はなしことばにみられるアドミラティヴの用例をみてみよう⁵。

“Я виж, то валяло!”

「あらっ、雨が降ってた！」

“Абе ти си бил богат човек, бе!”

「おい、おまえ、金持ちだったんだな！」

“Виж, имал съм най-високата оценка на изпита!”

「みて、（僕が）試験で一番の成績だって！」

“Ти си бил тук!”

「お前、ここにいたのか」

“Виж ти, имало още бонбони!”

「ごらん、まだ飴があったよ」

“Той бил четял тази книга.”⁶

「彼がこの本を読んだなんて」

一つ目の例文“Я виж, то валяло!”で話し手がことばを発するとき、そこには雨が降っている景色が広がっている。しかも、発話以前に雨が降っていたことは、話し手がことばを発する直前に気付いたこと（目の当たりにしたこと）であり、想定外のことだったことをここでは言及するために用いられている。それ以下2つの例文についても同様のことが言える。マカルツェフ／ジェルノヴェンコヴァ（Макарцев, Жерновенкова 2012 : 146）は、「何らかのほかと違ったことや驚いたこと」に対する直接的反応を示す際にアドミラティヴが用いられると指摘する。

とくに目前で進行中の動作をみて発せられた“Я виж, то валяло!”は“Я виж, то вали!”「あらら、降ってるよ！」のように、“Виж ти, имало още бонбони!”は“Виж ти, има още бонбони!”「ごらん、まだ飴があるよ」という具合に直説法でも言い換えることができ

⁵ 例文はマカルツェフ／ジェルノヴェンコヴァ（Макарцев, Жерновенкова 2012 : 146）ほかから。

⁶ 当該例文にみられる бил について、アカデミー文法（БАН 1983/1993 : 361-362）は、強調された再話の時と同様に、具体的な意味を強調するために、その形態は бил を伴い拡張し得ると指摘する。例）“Боже мой, какви низости било имало (=има) по света!”「まあ、一体全体この世にはなんという悪事があることか!」; “Ти си бил знаел (=знаеш) много неща, а мълчиш.”「まったくお前さんったらおもしろいことを知っているというのに、黙っているんだからなあ」

る⁷.

目の前で繰り広げられている出来事や事実に対し、そのことについて言及する点では、直説法もアドミラティヴも同じである。では何が異なるのかといえば、前者は話し手の主観的態度が加味されておらずニュートラルにものごとを伝えるのに対して、後者は話し手にとって知覚によって得た新しい情報や新しい認識、何らかの主観的態度、心的態度を加味して伝えることにある。目の前の出来事に対する話者の心的態度の違いが表現の違いとして現れている。

4. 結びにかえて

本稿では、ブルガリア語のアドミラティヴについて、まずブルガリア語文法における先行研究を概観しながらアドミラティヴの抱える問題点を整理し確認した。浮き彫りになった最大の問題点は π 分詞で表現されるアドミラティヴが文法範疇のどこに位置するのかという点である。その形態的特徴から体と時制と π 分詞の相関性が文法上の解釈を複雑にしていることを指摘した。次に、アドミラティヴの事例研究として、 π 分詞で示される用例について意味、用法の観点から分析を行った。

アドミラティヴの特徴を形態や意味、用法の面から整理すると、以下の点が挙げられる。

- ・ 繫辞動詞と π 分詞からなる合成形で表現される
- ・ 3人称単数・複数において繫辞動詞が省略される
- ・ π 分詞は定過去（アオリスト）語幹と半過去（インペルフエクト）語幹の双方から作られた形が用いられる
- ・ 話し手にとって発話の瞬間の直前に初めて知覚したことがらについて言及
- ・ 話し手にとって予想外のこと、驚きのことなどを表す
- ・ はなしことばにみられる用法である

⁷ マカルツェフ/ジェルノヴェンコヴァ (2012 : 146) が挙げている例 (直説法 - アドミラティヴの順) : “Данчо *дойде*.” 「ダンチョがやってきた」 - “Я виж, Данчо *доишъл*.” 「あらっ, ダンチョが来た」; “Надя *купи* кола.” 「ナーデヤは車を買った」 - “Я виж, Надя *купила* кола.” 「あらっ, ナーデヤが車を買ったんだあ」; “Пуснаха *този* булевард.” 「この大通りが開通した」 - “Я виж, *пуснали* този булевард.” 「あらっ, この大通りが通れるようになったんだあ」 “Имам *нови* ботуши.” 「私は新しいブーツを持っている」 - “Я виж, *имал* съм *нови* ботуши.” 「あれっ, 新しいブーツを持っていたんだあ」 “Йорданка *се омъжи* за чужденец.” 「ヨルダンカは外国人と結婚をした」 - “Я виж, Йорданка *се омъжила* за чужденец.” 「あらっ, ヨルダンカが外国人と結婚したって」

ミルチェフ (Mirčev 1978 : 232-233) はブルガリア語の半過去 (インペルフェクト) 能動分詞の派生につき歴史的観点から, トルコ語の動詞接尾辞-miş との関係性を指摘している。トルコ語の動詞接尾辞-miş と (アド) ミラティヴの関係性については本研究会の鈴木泰先生からも興味深いご指摘をいただいている。この事象に対する類型学的考察については今後の課題としたい。

参考文献

- Андрейчин Л. (1938/1976), “Начин на изказване”, в Помагало по българска морфология, Глагол, София
- Бешевлиев В. (1928), “Към въпроса за т.нар. «адмиратив» в български език”, в Македонски преглед, кн. 1
- Бояджиев Т., Куцаров И., Пенчев Йо. (1999), “Съвременен български език”, София
- Българска Академия на науките, Институт за български език (1983/1993), “Грамматика на съвременния български книжовен език”, том 2, Морфология, София
- Weigand G. (1925), “Der Admirativ im Bulgarischen”, Balkan-Archiv, Fortsetzung des Jahresberichtes des Instituts für rumanische Sprache, 150-152, I Band, Leipzig
- Герджиков Г. (1984), “Преизказването на глаголното действие в българския език”, София
- DeLancey S. (2001), “The mirative and evidentiality”, Journal of Pragmatics, vol. 33
- Иванчев Св. (1973/1976), “Проблеми на развитието и функционирането на модалните категории в български език”, в Помагало по българска морфология, Глагол, София
- Макарцев, М.М., Жерновенкова, Т.Г. (2012), “Българский язык, Самоучитель”, Москва
- Маслов, Ю.С. (1981), “Грамматика болгарского языка, для студентов филологических факультетов университетов”, Москва (筆者注: 同書は翌 1982 年にブルガリアの Наука и изкуство 社からブルガリア語訳も発刊されている; Маслов Ю.С., “Грамматика на българския език”, София)
- Мирчев К. (1978), “Историческа граматика на българския език”, София
- Ницолова, Р. (2008), “Българска граматика – Морфология”, София
- Романски Ст. (1926), Рецензия за Г. Вайганд, в Македонски преглед, кн. 2
- Slobin, Dan and Ayhan Aksu (1982) “Tense, Aspect, and Modality in the Use of the Turkish Evidential”, Tense-Aspect: Between Semantics and Pragmatics, ed. by Paul Hopper, 185-200, John Benjamins, Amsterdam
- Стоянов Ст. (1964/1984/1999), “Грамматика на българския книжовен език, Фонетика и морфология”, София
- 竹内和夫 (1977), 「トルコ語文法入門」, 大学書林, 東京
- Трифонов Ю. (1905), “Синтактични бележки за съединението на минало действително причастие с глагола съм в новобългарски език”, в Периодическо списание на Българското книжовно дружество в София, т. 66, кн. 3-4
- Цонев Б. (1937/1985), “История на българския език”, Б. Специални части, том 3, София